創刊の辞（巻頭言）

二村　久則

名古屋大学大学院国際言語文化研究科が 1998 年 4 月に設立されてからちょうど 3 周年を迎えるこのたび、同研究科国際多元文化専攻の機関誌『多元文化』を創刊する運びとなった。

新しい世紀の劈頭にあたる記念すべき年に、ささやかながらも研究成果をこのような形で世に問うことができるようになったことを、本研究科の発足とその後の発展に並々ならぬ尽力をされた平井研究科長、小栗言語文化部長をはじめとする関係教官、事務職員諸氏、ならびに大学院生のみなさんとともに喜びたい。

そもそも国際言語文化研究科は、言語衝突、文化摩擦、民族紛争といった今日の国際化社会が抱える諸問題に対処するため、日本および世界の諸地域の言語文化を国際的視野から捉えなおすことによって言語と文化の研究に新領域を開拓しようとする目的をもって設立されたものである。国際多元文化専攻は、既存のアカデミズムを横断する言語文化の諸問題と、世界の諸地域に新たに生成しつつある文化に関する研鑽を礎石とし、実践的語学力を身につけた、国際理解と国際協調に貢献しうる人材の養成をその使命としている。

２度におよぶ世界大戦と幾多の国際紛争、地域紛争を経験し、膨大な人命の犠牲を払ってきたわれわれ人類に２０世紀という過去が与えてくれるおそらく最大の教訓のひとつは、世界には優劣をつけることができない数多くの貴重な文化があり、それぞれの文化どうしお互いに尊重しあわなければならないということであろう。前世紀末から始まったグローバル化がいっそう加速されることが予想される２１世紀において、これ以上流血を伴う紛争を回避し、諸民族諸文化間の相互理解を推進して持続可能な発展を地球的規模で維持していくためには、多元文化的視点こそがもっとも必要とされよう。その意味で、国際多元文化専攻はまことに時宜にかなった研究・教育組織としてますますその存在意義を増している。

『多元文化』の創刊号は、目次を見ていただいただけでもおおよその想像が

つくように、以上に述べたような本専攻の目的を端無くも体現し、言語的にも文化的にも、東洋と西洋、近代と現代にまたがった構成となっている。若手教官と院生による力作、意欲作揃いと言いたいところであるが、なにぶんにもまだ一歩を踏み出したばかりの本誌ゆえ、至らぬ点、改善すべき点も多々あろうかと思われる。大方の御叱正を請うとともに、暖かい目で向後の発展を見守ってくださるようお願いする次第である。